蔣介石の人格形成と日本

黄　自　進

一、はじめに

蔣介石（一八八七―一九七五）は生涯にわたって、自分の成長経験を取り上げ、国民を激励する講演あるいは訓示を行っていた。そこでよく取り上げられたのは、母の教訓と新潟県高田連隊での軍人生活であった。八歳の時に父を失った蔣介石には[1]、いわゆる家庭教育が当然母の教訓しかなかった。高田連隊の軍人生活が母の教訓と肩を並べて論じられたことは、彼の生涯に日本での留学経験[2]がいかなるウエートを占めていたのかを窺わせるだろう。

本稿は、こうした認識に鑑みて、蔣介石の日本での留学経験、さらにその後の来日経験を合わせて考察することにより、青年から壮年に至るまでの彼の人格形成における日本の位置づけを明らかにしようとするものである。

二、留学期

蔣介石が最初に日本へやってきたのは、一九〇六年四月のことで、一九歳のときであった。東京にある語学専門の清華学校に半年間通って日本語を学んだが、その後帰国した。蔣介石としては軍事を勉強するつもりで来日したのだが、本国の陸軍部の推薦がない限り、日本の軍学校には入学が許可されないことがわかったために帰国したのである[3]。

このときの滞在は半年にすぎなかったが、来日の成果は小さくなかった。同郷浙江省の先輩である陳其美（一八七八―一九一六）を知ったことは、そのひとつである。また、陳其美の仲介により、宮崎滔天（一八七〇―一九二二）の自宅で孫文（一八六六―一九二五）にも出会った[4]。そのときの日本滞在では、孫文との交流は生まれな

かったが、中国は革命するしかない、という孫文の思想に関心を寄せ始めることになったのである。

二回目の来日は一九〇八年の三月である。今度は軍人留学生として日本にきた。前回帰国した蒋介石は、日本で軍事を学ぶ夢をかなえるために、清国の軍学校に入学し、この軍学校で日本留学組に抜擢された。こうして日本で入学したのは、「振武学校」であった。

振武学校は東京の新宿にあったが、その所在地には現在、東京女子医大がある。振武学校は一九〇三年に創立された、清国政府から派遣された軍人留学生専用の予備学校であった。その学校運営は、委員長の福島安正陸軍少将をはじめ、学生監察官は木村宣明陸軍大佐であるなど、日本の現役武官によってなされていた(5)。

表1に示したのは、蒋介石が振武学校で学んだ科目である(6)。

この科目に示されているように、三年間の授業で、最も多くの時間を費やしたのは日本語の一七三四時間であり、これは全授業時間の三九・七％を占めている。次が理数系科目の一三一六時間で、三〇・一％である。軍事に関する科目は第三番目であって八八〇時間、二〇・二％を占めるだけにすぎなかった。

しかも、わずか二割ほどの軍事課程のうち、実に七割が体操であったから、軍事訓練といっても身体を鍛えることが中心である。したがって、振武学校は軍学校とはいうものの、かなり普通の中学に近いものであったと考えられる。

表1　振武学校の課程科目

課程	科目	授業回数（時間）	合計（時間帯）	総計（時間帯）
軍事課程	典令教範	二六五	八八〇	四三六五
	体操	六一五		
普通学課程	日本語	一七三四	三四八五	
	歴史、地理、地文	二四六		
	数学（算術、代数学、幾何学、三角法）	九一二		
	物理、化学	三〇〇		
	博物（包括動物、植物、生理衛生、礦物）	一〇四		
	図画	一八九		

ところで、日本へ来る前に、中国古典文学中心の教育を受けていた蒋介石としては、この三年間の中等学校教育が、現代科学文明の洗礼を受けた最初の経験となった。

また、この三年間の教育が、日中両国文化の差異探求の始まりでもあった。図1は、蒋介石が勉強した地理学教科書の内容の一部である。

男の弁髪と女の纏足は、中国人社会の風習である。特に纏足の習

慣は何百年にもわたって受け継がれていた。足が小さければ小さいほど魅力的な女性だと考えられており、足が大きく育たないように小児のときから足指を布で固く縛り、発育をおさえたのである。この結果、足の骨が図に描かれているように変形してしまい、あまり歩けない人さえあったと教科書は伝えている[7]。

女性の纏足は当たり前のことであると思って育ってきた蔣介石は、この図を初めて見たときには驚いたに違いない。生涯を通じて蔣介石は、中国の伝統を科学的視点から見直す必要があると主張したが、その原点にはこの図から受けた衝撃があったのではないだろうか。

一方、歴史の科目は、東洋史と西洋史に分かれていた。東洋史は、中国史を中心としたもので、西洋史は、西洋諸国の歴史を中心とするものである。それぞれ教科書の著者は別であるが、盛衰興亡を焦点とした書き方は同じである。つまり、東洋史では、中国の易姓革命による各王朝の興亡を論じていたが[8]、西洋史では、各地域文明の興廃が検討されていた[9]。また、ダーウィンの進化論を基に「適者生存」という観点から、文明の盛衰を指摘するものであった。

すなわち、各時期にはそれぞれの時代の要求というものがあるが、その時代の期待に応えることができるものだけが生き残る、という書き方は、東洋史と西洋史の教科書に共通であった。近代の場合、アジア諸国が西洋列強に支配され、中国は列強の進出を受けていたが、そればかりではなく日本も列強に脅かされている、ということがこの時代の趨勢であった。したがって、このような時代の挑戦に応えられるかどうかによって、日本という国の運命が決まるというのである。

いいかえれば、西洋諸国がアジアに攻めてきている以上、彼らのやり方が正義かどうかを論じることより、むしろ日本がどのように時代の挑戦に対応すべきかを検討することのほうが重要である、とこれらの教科書は述べている。

歴史の検討においてもっとも大切なことは、是と非とを理解することである、という考え方に立って孔子は中国の古典的史書『春秋』を編集した。したがって、是と非という価値観を基準として歴史を振り返るということが、中国のインテリの歴史の見方である。

図１　蔣介石が使った地理学の教科書（矢津昌永『新撰外国地理』東京、丸善株式会社、1901年、40頁）［国立国会図書館近代デジタルライブラリー蔵］

ところで、一九世紀以降に中国が関わったすべての紛争は外国に責任がある、というのが中国人の考えであった。つまり、既定の秩序を破壊したのは、中国ではなく敵国のほうであった。しかし、教科書から見る限り日本人の歴史観は、このように是非を論じるより、時勢はどのようであったかを客観的に認識することのほうが重要である、というものであった。

蔣介石には、生涯を通じて一貫して、日本に学ぶべきであるという論調が見られる。「天は自ら助くる者を助く」ということが、蔣介石が長年にわたって日本を観察して得た結論であったし、同時に、彼が中国人に対して、日本に学ぶよう呼びかけた動機でもあった。蔣介石がこのような結論に達したことも、日本人の歴史観と関係があるだろう。

蔣介石は、一九一一年一一月に振武学校を卒業した。卒業時の成績は一〇〇点満点中六八点で、六二名の卒業生中で五五番目であった。[10] このように成績からすれば、目立った存在ではなかったが、革命運動にはことのほか熱心であった。

一九〇八年、振武学校に入学した年に、蔣介石は秘密結社「革命同盟会」に入会している。入会を仲介したのは、同郷の先輩、陳其美であった。[11] この入会をきっかけに、蔣介石は人脈的に陳其美の直系になったといえる。また、蔣介石は夏休みを利用して帰国すると、上海の革命組織にも参与していた。

ところで、当時の陸軍における士官養成の制度によると、陸軍士官学校に入学するには、事前に一年間の入隊経験が必要であった。中国の軍事留学生にも同じ経歴が要求されていたので、蔣介石はこのルールによって、振武学校卒業後一二月五日に、砲兵を目指して、新潟県高田町（現・上越市）の第十三師団野戦砲兵第十九連隊に士官候補生として配属された。[12]

明治年間の陸軍教育史によれば、野戦砲兵としての一年間の教育内容は表2のとおりである。[13]

蔣介石も表2にしたがって、一九一一年六月一日に上等兵に昇進した。次いで二か月後の八月一日には伍長に進んだ。[14] さらに制度にしたがえば、一二月一日には軍曹になった上で、その後に士官学校に入学するはずであった。

つまり、士官候補生は一年間の入隊経験が完了すると、改めて士官学校に入学するのである。そこで一年半勉強して、卒業すると、もう一度前に所属していた連隊に戻ることになる。さらに見習士官として半年間にわたる実習の後、満期になるとただちに少尉に任官するのである。[15]

ところが、蔣介石が伍長であった一九一一年一〇月一〇日に、辛亥革命が勃発した。この報に接した蔣介石は、革命に身を投じるため、連隊の研修をやめて帰国することを決意した。上海に到着したのは一〇月三〇日であったが、連隊から無断退出したため、一一月

八日に陸軍大臣・石本新六から除隊処分が通告された。同期六二名の研修生のうち同じ理由で処分されたのは、蔣介石を含めて三名し

表2　野戦砲兵一年間の教育内容

野戦砲兵一ヶ年間教育順次表

学期	期間	術科 初年兵	術科 二年兵及三年兵	学科 初年兵	学科 二年兵及三年兵
第一期	十二月上旬ヨリ三月下旬迄	徒歩教練 体操 砲操法 照準法 拳銃ノ操法及射撃 部隊教練（中隊） 野外演習	同上ノ課 同 馬術 駁法教練	勅諭 読法 各兵種ノ識別及性能 団隊編制ノ概要 上官ノ官姓名 武官ノ階級及服制 勲章ノ種類及起因 軍隊内務書ノ摘要 陸軍礼式ノ摘要 陸軍刑法懲罰令ノ摘要 武器乗馬具駄馬具被服装具ノ名称装法 馬体ノ名称手入及手入法 飼養法 弾薬及火具ノ種類取扱法ニ其効用ノ大意 野外要務令ノ摘要	初年兵第一、第二期ノ課目
聯隊長ノ検閲					
第二期	七月下旬迄	第一期課目 部隊教練（大隊） 馬術 駁法教練 工作 游泳及水 馬術	第一期課目 部隊教練（大隊） 工作 游泳及水 馬術	衛兵勤務 輓馬具名称装法及手入法 馬学摘要 工作物ノ名称及構造 火工術ノ摘要 赤十字条約ノ大意 救急法ノ概要 聯隊歴史ノ大要	同右
聯隊長ノ検閲					
第三期	十月中旬迄	第一、第二期ノ課目 部隊教練（聯隊） 射撃	同上	第一第二期ノ科目	同右
師団長ノ検閲					
第四期	十一月下旬迄	秋季演習			

備考

一、第一期中野砲兵ハ馬術、山砲兵ハ駁法教練ヲ教ユルコトヲ得

二、野砲初年兵ノ部隊教練及野外演習ハ第一、第二期ニアリテハ駁法ヲ除ク

三、北海道、弘前及金沢屯在ノ聯隊ニアリテハ第一、第二期ヲ合シテ教育シ其第一期検閲ヲ四月ニ於テ行フコトヲ得

四、二三年兵ハ游泳水馬術ト共ニ漕艇術ヲ行フコトヲ得

五、照準手ノ撰抜検査ハ射撃演習前ニ於テ終ルヲ要ス

六、第三期ノ射撃ハ第四期ニ於テ行フコトヲ得

七、砲兵旅団ニ於ケル第三期ノ検閲ハ該旅団長ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

八、三年兵ニハ適宜ノ時機ニ於テ騎銃ノ機法及射撃ヲ教ユヘシ又拳銃射撃ハ第二若クハ第三期ニ操下ケ施行スルコトヲ得

かいない[16]ということは、彼の革命に対する熱意が人並み以上のものであったことを窺わせる。

この除隊によって、蔣介石の日本における正式の勉学、訓練は終わった。しかしながら、その後の蔣介石が中国に近代的な軍隊を建設し、あるいは国家統治を担当する上で、この日本の軍隊における生活経験から啓発されたことの意義は大きかった。

蔣介石がこの経験から学んだことは、軍人は国家命令に従うことを絶対とすべきであること、軍人に対する政治的な訓練は、軍人を勇敢に戦場へ向かわせるための秘訣であること、兵営は職業学校の役割も果たすもので、入隊した兵士には皆、技術を習得する機会を与えるべきであること、等々である。これら国民政府軍の建軍にあたって取り入れられた理念や制度は、いずれも日本滞在中の経験から得たものであることを、蔣介石は後に語っている[17]。

三、青年期

辛亥革命に参加するため、日本から中国へと飛んで帰った蔣介石は、一一月三日に上海周辺の杭州での蜂起に参加した。そこで蔣介石は決死隊の隊長になり、杭州制圧に一役買った。その後、新しい上海都督・陳其美の下で第五連隊の連隊長に任命され、革命軍兵士の訓練にあたった[18]。ただし、この職にあったのはわずか二か月ほどにすぎない。というのは、蔣介石は革命党内部の闘争にまきこまれたため、この職を辞せざるを得なくなったからである。

実は、革命党陣営の中にもいろいろな派閥があった。たとえば、当時は上海を地元とする光復会のリーダー、陶成章（一八七八―一九一二）が浙江都督を目指しており、陳其美の打倒を考えていたのである。これに対して、陳其美直系の蔣介石は、陳の地位を守るために、一九一二年一月一五日に部下一人とともに陶を暗殺した[19]。

権力闘争のために、革命の同志を殺害したことに対して、光復会からの反発は大きかった。彼らの復讐を避けるため、蔣介石は日本に逃れた。ここで特筆に値することは、日本に避難した蔣介石が、密やかで消極的な生活をするのではなく、むしろ、いかに周囲の環境を活かして自分の成長に役だてようかと考えていたことである。

蔣介石が東京で『軍声』という雑誌を創刊したことは、彼の人生における再出発となった。一九一二年一一月二〇日に上海の『民立報』に次のような出版広告が掲載された。「日本偕行社記事の例に倣い、さらに若干の変化を加えたものというのが本雑誌の体裁である[20]」。

日本の偕行社は、陸軍将校の親睦研究団体として設立されたものであったが、軍部の援助を得て月刊誌『偕行社記事』は、大衆向けにではなく、軍部の考えを将校団内部に伝え、その共通認識を養成するために発刊されていた[21]。したがって、『偕行社記事』に倣うということは、雑誌『軍声』が、有志とのネットワークづくりをも念

頭においていたことを示している。

雑誌『軍声』には、蒋介石は五篇の論文を発表した。それらは、軍政問題をはじめ、外モンゴルの独立及びバルカン半島の情勢に関する分析である。その中で、彼の対外認識を端的に物語っているのは次の二つの論文である。

一つは「革命戦後における軍政の経営」というタイトルの論文で、満州をめぐる日本とロシアの植民政策の比較分析を行ったものである。これは中華民国の成立以後、いかなる国防政策を取るべきかを主題として論述したものだが、中国の主権と領土を脅かしてきた国として、イギリスと日本、そしてロシアの三国を取り上げている。蒋介石によれば、これら三か国は、いずれも中国に対して帝国主義的な政策を実施したが、政策の重点は国によって異なる面も見られたという。

例えば、イギリスの主な関心事は、経済利益の擁護であるが、日本とロシアは経済利益ばかりではなく、領土への野望も持っていた。さらに、満州をめぐる日本とロシアの基本政策について深く考察すると、次のような結論が得られる。すなわち、ロシアの場合、実質的な経営を行うことより、領土の獲得を優先して考える。また、武力で衝突を解決することより、むしろ脅迫で問題を解消しようとする。これに対して、日本人の満州経営は、ロシア人よりずっと地味で、なおかつ真面目であった。その結果として、日本人は満州経営に非常に力を入れてきたため、満州を簡単に放棄するわけにはいかないだろう、と蒋介石は指摘している。

このような見方から、蒋介石は、国力からみれば日本はロシアにとても及ばないが、東アジア地域に限れば日本はロシアより実力があると論じたのである[22]。

また蒋介石は、外モンゴルが辛亥革命勃発直後の混乱期を利用して、一九一一年一二月一日に「大モンゴル国」の建国を宣言したことに対して、「征蒙作戦に関する一試論」を発表した。蒋介石は、武力を用いて「大モンゴル国」を潰そうと考えたばかりではなく、次のような意見を述べている。

蒋介石によれば、外モンゴルへの進撃は、表面上は「大モンゴル国」を潰すための作戦であるが、実際に戦う相手はロシアである。つまり、「大モンゴル国」はロシアの傀儡政権に過ぎないので、ロシアの勢力を潰さない限り、モンゴル問題も解決できないというのであった。

対露作戦を考える際には、日本の反応も注意しなければならない。満州に対する日本の野望を念頭におけば、日本が中露衝突を利用して満州に進出しようとする可能性は相当に高い。また、日本の中国進出をきっかけとして、列国が中国を分裂させようとする流れに加わることになれば、中国は瓦解するおそれがあると蒋介石は強調した。

また、中国をめぐる国際環境を考えれば、中国が同時に日本とロシアの両国と開戦することは不可能である。したがって、ロシアとの開戦を決意するなら、先に日本との妥協を成立させる必要がある、と蒋介石は主張した。しかしながら、どのような具体的条件の下で日本と妥協するべきかについて、蒋介石は論じておらず、満州における中国の宗主権を放棄するのでなければ、その他のことには何でも応じる余地がある、と述べるにとどまっている[23]。

以上述べた二つの論文は、いずれも蒋介石が二五歳の時に書かれたものである。その意味では、青年期における彼の政治思想を表したものであるといえよう。以上述べたことから、青年期の蒋介石の日本認識を次のようにまとめることができる。

第一に、日本は、ロシアと同様に、中国に対する領土拡大の野望を持っている。第二に、日本の満州経営は、地味でなおかつ真面目である。このため、日本は簡単に満州を放棄するわけにはいかない。第三に、東アジアでは、日本がロシアを上回る力をもっている。したがって、中国が領土保全のために軍事行動をとる場合、対ロシア戦の優先順位のほうが上である。つまり、勝算を考慮すれば、実力で劣るロシアに対する作戦を先に進め、日本に対する軍事行動は後にするべきである。第四に、ロシアへの作戦を遂行するためには、日本との妥協が必要である。その際、少なくとも満州における宗主権は維持しなければならないが、その他の権益は一時的に日本に譲っても構わない、ということである。

『軍声』の売り上げが期待したとおりにいかないため、蒋介石は雑誌を休刊してドイツに留学しようと考えた。このため、一九一三年六月に上海でこの留学計画を陳其美に報告すると、陳は蒋介石の留学を思いとどまらせた。その背景には、辛亥革命後、大統領になった袁世凱（一八五九―一九一六）が革命党打破の弾圧政策に乗り出しつつあるため、追い詰められた革命党が反袁の挙兵をすることは時間の問題である、という情勢認識があった。したがって陳其美は、反袁活動のために蒋介石の手を借りる必要があり、上海で待機してほしいと要請したのである[24]。

同年七月一二日、江西省において袁世凱打倒の軍事行動が起こされた。中国近代史上の、いわゆる第二次革命の始まりであった。しかしながら、列強の支持を受けられず、日本との借款交渉も失敗に終わり、また、一般民衆は革命後の政争に興味を示さず、経済界は平和をかく乱するいかなる動きにも絶対反対であったため、革命軍の主力部隊は、七月末には、圧倒的に優勢な袁世凱軍によって鎮圧されてしまった。

そうしたなか、上海では七月一八日に独立宣言が出された。陳其美は自ら討袁軍総司令になり、七月二三日に上海製造局を第一目標として総攻撃をしたが、製造局をなかなか落とすことができず、七月三〇日には敗北を認めなければならなかった。ただし、この上海

戦で、かつて連隊長を務めた第五連隊の一部兵士を率いて、蔣介石が先頭に立って戦ったことで、彼の名前は戦場で知れ渡ることになった。(25)

第二次革命の失敗とともに、孫文をはじめとして黄興（一八七四―一九一六）、李烈鈞（一八八二―一九四六）、陳其美などの革命のリーダーは相次いで日本に亡命したが、蔣介石もそのあとにつづいて九月一日に日本へ渡った。辛亥革命で清朝を倒してから二年も経たないうちに、民国建国の功労者である革命党が袁世凱によって一掃されてしまったことについて、革命党のリーダーたちの思いは複雑だった。

こうした逆境にあっても、新しい革命組織を築こうというのが、孫文の考え方であり、早くも九月二七日には、東京で中華革命党を創立した。(26)孫文自らが総理（党首）になったが、入党に際して、総理の命令への絶対服従を誓うという誓約書を入れることを条件とした。このため、古くから革命運動に携わってきた者たちからは、新しい組織の構築について、孫文が独裁体制を築くことを主眼としたものであると受け止められた。このため、黄興、李烈鈞などの元老たちは入党を拒否したのである。

元老たちが入党を拒否した結果として、それまで中堅幹部であった陳其美が、党の中心的な存在になった。こうして、陳其美は総務部長に任命され、党の全ての実務を取り仕切ることになった。(27)革命党内において陳其美の影響力が高まると、その直系である蔣介石にも活躍の機会がまわってくることになる。

一度は日本に亡命した蔣介石であったが、一〇月下旬には上海に戻り、一〇月二九日に上海で中華革命党に入党した。誓約番号は一〇二号で、中国国内での入党第一号になった。(28)しかしながら、蔣介石が帰国した本来の目的は、入党するためではなくて、討袁活動を再起させるためであった。彼は、一九一四年の初夏を目処として、武力蜂起によって上海を革命陣営の手に取り込もうとしたのである。この計画は実行直前に袁世凱政府に察知されてしまったため、多数の同志が逮捕され、処刑される結果となった。

このたびの反乱事件に対して、袁世凱は一九一四年六月一五日、蔣介石を首謀者として逮捕せよという大総統令を出し、事件の厳重な追及を命じた。(29)また、この事件について日本の上海総領事・有吉明は、今回の事件は浙江省出身の革命党党員が中心となって計画したものだが、この浙江派が上海革命党の中心的な存在であり、比較的穏健で団結力があるが、元のリーダーが日本に亡命したため、今は蔣介石が中心となってまとめ役を果たした、とする報告書を七月一〇日に外務省に送っている。(30)

以上のごとく、大総統令や、上海総領事の報告書に見られるように、第二次革命を通して、蔣介石は陳其美の代理人として活躍するようになっていた。外部の人間がこのように観察したばかりではな

く、革命陣営内部からも同じような見方が示されている。

上海蜂起の失敗で、再び亡命した蔣介石は、逮捕の大総統令が出される直前の一九一四年六月一二日に東京で孫文との面会を実現させた。革命党に入党してから六年を経て、この面会をきっかけとして初めて孫文との個人的なつながりができるようになった。

日本の警察の孫文監視録では、この年の六月から七月初旬の蔣介石と孫文との面会は二九回に及んでいる。蔣介石がこのように頻繁に孫文と面会していたことは、彼が孫文に重用されはじめたことの表れである。(31)

七月一〇日、蔣介石は、満州のハルビンに到着した。満州への出張は、孫文からの直接命令で、北満州における蜂起の可能性を探るためであった。当時、黒龍江省では伝統的な巡防隊から新しい陸軍へと再編するため、五一歩兵大隊から一八大隊にまで削減していた。この削減策のため、多数の兵士が解雇され、連隊長の軍事指導権も縮小されていた。そこで孫文は、元の連隊長と、解雇された兵士たちの不満を利用して挙兵しよう、という思惑を抱いていたのである。(32)

ところが蔣介石が現地に到着してみると、中華革命党の満州支部としては、この件は、蜂起を名目として東京本部からお金を引き出すことを主たる目的としていることが判明した。このため、北満州での挙兵の計画は諦めざるをえなかった。

ちょうど蔣介石が満州滞在中の七月二八日、オーストリアがセルビアに宣戦を布告した。この宣戦を知った蔣介石は、「欧州大戦の発展傾向および倒袁政策」というテーマで、八月二日に孫文に計画書を提出した。

計画書において、蔣介石は、戦争は二国間にとどまるものではなく、必ずや全ヨーロッパを巻き込んでいくとの見通しを示し、戦争が拡大すればするほど、列強はアジアのことを顧みる余裕がなくなるだろうと論じた。このため、アジアには力の真空状態が生まれることになり、日本の中国進出を招くことは時間の問題となる。しかも、袁世凱政権は西洋列強のバックアップによって成り立っているため、列強の支持がなくなると政権の基盤は自然に弱体化する。したがって、袁政権の外交的困窮を利用して、いかにこの政権を打倒するかということが、革命党として当面検討すべき政策となる、というのである。

今までの経験では、革命派に対して袁政権が優勢な軍事力を持っていたため、各地で同時に蜂起しても、袁政権側の軍事力を分散させることはできなかった。逆にこちらの兵力が足りないため、失敗を重ねるばかりである。これらの失敗に鑑み、今後の挙兵は一か所のみに集中すべきであると蔣介石は強調した。

その挙兵の場として、彼が推薦したのは浙江省であった。地理的環境からいうと、浙江省の戦闘においては、陸軍より海軍が重要である。袁政権の海軍は弱いため、海を戦場とすることは、革命党に

とって比較的有利である。さらに、浙江省の軍隊は、それも特に中間幹部らは、殆ど革命党の理想に共感を持っている。したがって、浙江省での挙兵は、他の省と比べて軍隊から支持される可能性が高い、と蔣介石は指摘した。[33]

この年八月一六日、蔣介石は東京に戻ったが、滞在はわずか二週間ほどで、八月三一日には再び東京を後にした。行く先は上海であった。一五日間の東京滞在において、蔣介石が孫文に会わなかった日は、二日だけである。しかも、残りの一三日間において、孫文との会見は二四回に及んだ。つまり、中には一日に二回以上、八月二四日などは、一日に四回も会ったという記録がある。[34]

その上、この間に孫文は蔣介石に二万ドルを渡している。[35] わずか二か月前に初めて孫文と面識を得たばかりであったにもかかわらず、この時期になると、孫文にとって、蔣介石は不可欠な存在になっていたのである。また、頻繁な交流と大金の供与は、孫文が蔣介石の計画書を受け入れたことを示している。

蔣介石のプランが革命党の新しい政策になったことは、彼の時勢に対する洞察力を孫文が認めたことをも意味していた。それまで、蔣介石は陳其美の下において行動派として活躍していたのだが、このたびの計画書提出を通して、参謀としても有能であることが革命党内でも知られるようになった。

ところが、浙江省を新しい革命根拠地として蜂起しようとする計画は、袁世凱政権に洩れてしまった。このため浙江省の第六旅団をもって反袁活動の策動を起こすという計画が実行する前に露見し、仲介者たちは逮捕され、上海では二百数名、杭州では三十数名の革命党党員が処刑された。[36]

蜂起の基礎となる組織が崩壊してしまい、再起には時間を要する事態になったため、蔣介石は再び東京に亡命した。ただし、東京に戻った蔣介石は、孫文に会うことができなかった。浙江省蜂起が失敗したため、孫文は蔣介石に不満を抱き、距離をおいたのである。

ところで、孫文に遠ざけられた蔣介石は、これで意気阻喪してしまうのではなく、かえって猛烈に勉強することで、この不遇を乗り越えようとした。彼の日記によれば、この東京での蟄居が、人生でもっとも軍事学の勉強に力を入れた時期になったという。彼は、元軍事教官の小室敬二郎指導の下で、士官学校のすべての必修科目を独学で勉強した。[37]

すでに述べたように、蔣介石は士官学校への入学準備の中途で辛亥革命に身を投じて、士官学校への進学を諦めていた。そこで、この度の亡命期間を利用して、自学自習で士官に必要な教養と知識を身につけたのである。つまり、かつて辛亥革命直後の日本亡命期を利用して、軍事雑誌を編集したときと同様の生活態度を示した。すなわち蔣介石は、今回の不遇の時期においても、積極的に周りの環境を自分の成長に役立てる方策を見出し、実行したのであった。

蔣介石が孫文に再会したのは一九一五年三月六日のことであり、実に七か月ぶりであった。このきっかけをつくったのは陳其美である。陳としては、中国での革命活動がうまくいかなかった理由を、自分が現地にいなかったせいであると考え、中国へ戻ることを決意していた。そこで陳其美が東京を留守にする間に、本部と彼との連絡役には蔣介石が一番ふさわしい、という理由で孫文を説得することに成功したのである[38]。

孫文の監視録によれば、三月以降の蔣介石との面会記録は、四月が二回、五月は三回、六月は一回、七月は二回、八月は三回、九月は三回、一〇月は二回、そして一一月は五回であった[39]。この数字から見れば、両者の交流はかなり頻繁であり、蔣介石が再び孫文の信頼を取りもどしたことがわかる。

同年一一月下旬になると、蔣介石の姿は上海にあった。その後、陳其美が主導したあらゆる反袁活動において、彼は陳其美の右腕として活躍した。しかし、彼らの活動が余りに目立ったことが、一九一六年五月一八日の、上海における陳其美暗殺を招くことになった。

陳其美の死は、蔣介石にはいかにも無念であった。陳其美に捧げた祭文において、蔣介石は「これより先、世の中には、あなたのように、わたしを深く理解して、大切にしてくださる人はいない」と書き始め、最後には「あなたの遺志を完成させることは、私の責任である」と誓った。

このように先輩に対する深い思いと、天下国家に対する使命感に支えられて、蔣介石はその後、陳其美の後継者として歴史の表舞台に登場することになる。彼自身の言葉を借りれば、「陳の死によって、孫文が陳に期していたものが私に期待されるようになった」のである[40]。

四、壮年期

一九一九年一〇月一〇日、孫文は中華革命党を解散して、新たに中国国民党を組織した。この改組により、従来の秘密結社から脱皮して、国民に向けて開かれた政党に生まれ変わった[41]。一〇月二五日、孫文の命で蔣介石が日本に派遣された。

訪問の目的は二つあったのだが、孫文の友人、元満鉄理事・犬塚勝太郎が癌を患ったため、孫文の代理として見舞うことが、その表向きの目的であった。しかし同時に、国民党の成立に関する中国の最新情報を日本の友人たちに伝えることが、もう一つの目的であった。

蔣介石が上海に戻ったのは、翌月、一一月一六日であるが、この間二〇日ほどの滞在で、東京を始め、横浜、京都、神戸などを回った。また、頭山満、秋山定輔などの、長い間中国革命を支えてきた友人たちにも挨拶した[42]。

ところで、このような交流目的の日本訪問の大役がどうして蔣介

石に回ってきたのかについては、彼の日本訪問の日程を検討するだけでは理解することができない。この疑問に答えるためには、まず、当時の革命陣営における蔣介石の位置づけを知る必要がある。

孫文が日本亡命を終えて中国に戻ったのは、一九一六年四月二七日であった。雲南省で挙兵した袁世凱討伐の「護国軍」に呼応するためであった。結果的には、護国軍の挙兵が、袁世凱の急死を齎したことにより、北部を支配する袁政権支持派と南部を拠点とする反袁派の南北和解が可能になった。

しかしながら、一時的に成立した和解によっては南北対立の根本的状況を変えることはできなかった。したがって、一度は統一された中国が、民国初年に設立された国会と国家の基本法である「臨時約法」を守るかどうかをめぐって意見の対立が表面化し、再び分裂してしまった。

この結果、一九一七年八月二五日、国会と臨時約法の復活を目指す「護法」を提唱して、孫文が海軍と代議士を率いて、広州において中華民国軍政府を樹立し、大元帥に就任した。

ところで、孫文が軍政府を樹立することによって新たな政治の舞台を築くために必要な経費は、ドイツ政府からの出資によっていた。実は、護法を巡る南北の対立・衝突の原因は、第一次世界大戦に中国が参戦すべきかどうかにあった。というのは、当時の国務総理・段祺瑞（一八六五―一九三六）はアメリカの誘いに乗って、ドイツと国交を断絶し、さらに一歩進んで、ドイツへの宣戦まで主張していたが、この第一次世界大戦参戦政策には、大総統・黎元洪（一八六四―一九二八）をはじめ、多くの代議士が反対であった。このために両者が衝突した結果、黎元洪大総統は辞職させられ、国会は解散した。

これに対して国会の解散は不法であるとして、徹底して段祺瑞政権を糾弾するというのが孫文の立場であった。ところで、ドイツ政府から見ると、中国の参戦はぜひとも防止したいところだが、そのために頼りになるのは孫文だけであった。こうして、ドイツの中国駐剳公使フォン・ヒンツェ（Paul von Hintze 一八六四―一九四一）が、一九一七年三月二五日に帰国する前に、上海総領事のクニッピング（Hubert von Knipping 一八六八―一九三五）を通して孫文に二〇〇万ドルを提供したのである。[43]

孫文はこの二〇〇万ドルを基金とし、海軍大臣・程壁光を通じて海軍の支持を得て、軍政府を樹立したわけである。このとき、上海を中心とするかかる工作推進の責任者は蔣介石であった。[44] つまり、蔣介石が、各方面との折衝の任に当たり、この大金運用の事務的責任をも担ったのであった。

この重要な局面で蔣介石が表舞台に登場したことは、陳其美が生前に築いた上海の基盤を彼が受け継いだことを証明している。そればかりではなく、二〇〇万ドルという大金の取り扱いを任されたこ

とは、孫文が蔣介石をいかに信頼したかを示すものでもある。また、このとき大金の運営を担当することによって、彼は上海の金融関係者とのパイプを築くことができた。いいかえれば、蔣介石と上海金融界との関係はこの時期から深くなっていったのである。

一方、広州で成立した中華民国軍政府は、基本的に西南軍閥の武力に依拠していた。彼らが孫文を支持したのは、北京政府の統一政策に対抗するためである。つまり、彼らの主たる関心は、いかにして既存の勢力を温存させるかということにあった。特に北京政府で新しく大総統代理となった馮国璋（一八五九―一九一九）が平和論を唱え、主戦派の国務総理・段祺瑞と対立した際に、西南軍閥は馮を支持して、北京政府と平和交渉を進めることを望んでいた。

しかし、このとき孫文は、あくまでも南北統一政府の樹立は、国会と臨時約法の復活を前提とすべきであると主張した。ところが、それでは馮の法律上の地位が否定されることになるため、孫文を排除しない限り、中華民国軍政府と北京政府との平和交渉は不可能であった(45)。

このため、一九一八年五月四日に、西南軍閥が軍政府を改組させて、大元帥という職を廃止した。結局、政治基盤を失った孫文は失意のうちに上海に去ることになった。ただし、孫文にとって八か月間の軍政府時代は、まったく実りがなかったわけではない。少なくとも、孫文は広東省の二〇警備大隊を手に入れ、直轄の部隊として編制することができたからである(46)。

これらの軍の総司令は元広東省の代理都督・陳炯明（一八七八―一九三三）であったが、作戦科主任は蔣介石であった。この直轄の部隊、いわゆる粤軍は孫文が広州を去るとともに、福建省へと進軍した(47)。この進軍の計画書を書いたのは、蔣介石であった。このことは、参謀としての蔣介石の一面を示すものである。

しかしながら、一九一八年三月一五日に作戦科主任に就職した蔣介石は、七月三一日に早くも辞職した。その理由は、同僚に排斥されたことにあった。これに対して、総司令・陳炯明は「わが粤軍が百敗してもかまわないが、あなたがいなくては困る(48)」という慰留の手紙を出し、さらに、第二支隊司令官という新しい職に迎えたいと要請した。

この要請に心動かされた蔣介石は、前の辞職から一か月半余り後の九月一八日に支隊司令官として粤軍に復帰した。この新しい職を得たことによって、蔣介石ははじめて千名の兵士を率いる司令官として、福建省の軍閥と実戦を交えることになった。

最初の戦いでは、蔣介石の第二支隊は破竹の勢いを示し、敵方から停戦を要求してきた。しかし、福建省側は一旦残兵を立て直すと、逆に五千名の兵を動員して反攻に出てきた。こうなると、敵の圧倒的な兵力に包囲された第二支隊の兵士は戦意を失い、逃げる一方であった。結局、大局を挽回できず、蔣介石は一人で戦場から脱出し

た。

この敗戦の責任をとるため、蒋介石は辞職を考えたが、陳炯明が「敗戦は、あなたのせいではなかった」と言って彼を慰め、休暇を与えた。(49)

蒋介石は、この二か月の休暇を利用して上海にいる孫文に会いに行った。しかし、一九一九年五月二日に復帰した蒋介石は、二か月半余りのちの七月二七日に再び辞職した。理由は、やはり同僚に排斥されたからであった。

先に述べたとおり、この孫文の直轄部隊は、広東省の二〇警備大隊を再編制してできたものである。このため、士官から兵士まで、すべて広東省の出身であった。浙江省出身の蒋介石が、広東人の社会に入り込むには無理があったのである。

この現状に絶望した蒋介石は、気分転換をはかるためにドイツへ留学しようと思い、上海へ行ったところで、孫文に引き留められた。孫文に、ドイツへ行く代わりに日本へ行くようにと言われたため、犬塚勝太郎のお見舞いという名目で日本にきたのであった。

つまり、一九一九年一〇月の蒋介石の日本訪問は、傷心の蒋介石を慰めようという孫文の配慮による旅だったのである。こうした経過から、二つのことを窺い知ることができる。ひとつは、日本への旅は、蒋介石にとって、それなりの魅力があったということである。もうひとつは、孫文がいかに蒋介石を大切にしていたかということである。ただし、孫文はたしかに蒋介石を大切にしていたのだが、両者の公式的な関係は必ずしも順調に発展していたというわけではなかった。以下に述べるように、むしろ、常になんらかのトラブルがついてまわったといえる。

孫文が亡くなったのは、一九二五年三月一二日のことであった。その当時、蒋介石は黄埔軍官学校校長であった。ところで、蒋介石は一九二四年五月三日にこの職を得るまでに、すでに述べた二回の辞職のほかに、一〇回も辞職していた。

この都合一二回の辞職の過程を振り返ると、次のような数字に纏めることができる。一九一八年から一九一九年までの辞職は二回で、その間職務についていた期間は合計一年と二七日、つまり三九二日間であった。一九二〇年にも二回の辞職をしたが、この間の勤務は二三日間に過ぎない。さらに、一九二一年には三回辞職して、勤務日数はわずかに四日間だけで、一九二二年から一九二三年までに四回の辞職をしたが、四回合計で勤務日数は一八一日であり、最後に一九二四年には一回だけ辞職したが、その勤務日数は二八日であった。(50)

このように、蒋介石が、辞職してはまた復帰するということを繰り返していたことは、何を示しているのであろうか。それは、蒋介石には革命の大業に身を投ずる意欲があるものの、彼の希望と現実の職務との間に常にギャップがあったということである。また、こ

れほど辞職に次ぐ辞職を繰り返したにもかかわらず、その都度、次の任務が与えられたということは、孫文の側が、蒋介石の実力と忠誠心を高く評価していたということである。このため、蒋介石は辞職する毎に、前と比べてよりよい条件が提供されて復帰が求められたのであった。

こうして、蒋介石は一二回の辞任を通して、そのたびに昇進しつづけることになった。しかし、蒋介石と革命陣営との葛藤を探ると、彼の思惑と革命陣営内部の権力闘争、さらには革命を巡る中国全体の時勢をも垣間見ることができる。

さて、蒋介石が一二回にわたって辞職を繰り返した過程を検討するに際して、この間を三つの時期に分けることができる。その第一期は、一九一八年三月から一九二〇年一一月まで、粤軍が孫文の直轄部隊として奮戦した時期であった。中堅将校であった蒋介石は、粤軍内部の地域主義に困惑させられ、同僚に排斥されたため、辞職したのであったが、こうしたときに彼の留任を求めたのは、先述のとおり粤軍の総司令・陳炯明であった。

第二期は、一九二一年二月から一九二二年四月まで、粤軍が西南軍閥を破って広東省に戻ったのちの時期であった。粤軍の勝利によって、一九二〇年一一月に孫文は広州で改めて軍政府を再組織し、翌年四月に非常大総統に就任した。ところが、軍事の大権を握った陳炯明は、次第に軍閥化の傾向を強め、一九二二年五月に孫文が北伐を開始しようとすると反乱を起こした。このため、孫文は再び上海に逃げるしかなかった。

この時期の蒋介石は粤軍の中心的幕僚になっていたが、陳炯明の軍閥化に対する不満があったため、抗議の手段として、彼は辞職したのであった。このとき、彼の留任、あるいは復帰を求めたのは、孫文をはじめとして廖仲愷（一八七七—一九二五）、胡漢民（一八七九—一九三六）、汪兆銘（一八八三—一九四四）などの国民党元老たちであった。つまり、この頃に蒋介石の実力を認めていたのは、孫文だけではなかったのである。

第三期は、一九二二年一〇月から一九二四年二月にかけての時期であった。このころ、孫文は西南軍閥と手を組んで陳炯明の粤軍を破り、三度目の広州入りを果たしていた。そして、彼はソ連の援助を受け入れ、共産党との合作によって、第三次広州政府を再建した。

この政府は、コミンテルンの指導の下に、ソ連式の民主集中制や政治委員制を取り入れた[51]ばかりではなく、国民革命軍及び黄埔軍官学校を創設し、農民運動の活動家養成のための農民運動講習所と宣伝講習所の設立など[52]を進めた。

この時期、蒋介石は軍の幕僚長でありながら士官学校創設の準備委員会委員長でもあった。しかし、それでも自分の実力を完全に発揮できる条件が整っていないとして四回にわたって辞職した。このたび彼の留任を求めたのは、孫文、廖仲愷、胡漢民、汪兆銘などの

国民党元老に加えて、許崇智（一八八七―一九六五）、楊庶堪（一八八一―一九四二）、鄒魯（一八八五―一九五四）など軍と党の最高幹部らであった。つまり、第二期とくらべて彼の声望はさらに高まっていたことが窺える。彼に期待を寄せる広い支持者がいたからこそ、彼は黄埔軍官学校という舞台を手に入れて、希望通りに軍隊を築き上げる機会にめぐまれることになったのである。[53]

それにしても、このように辞職すればするほど人望が高まっていくことは尋常ではない。この点について、どのように理解すればよいのだろうか。そこで、彼の再三にわたる辞職劇を改めて検討することにより、国民党内部の権力構造を明らかにするとともに、国民党を取り巻く時代背景を明らかにしようと思う。

第一期の蔣介石が辞職を通じて抗議した対象は、粤軍の地域主義である。中国全土の革命を目指す国民党としては、地域主義を排斥することは当然であった。したがって、蔣介石が地域主義に反対したことは、党の元老たちにも理解されたのである。

第二期において、蔣介石が抗議した対象は、陳炯明の軍閥化であった。陳が革命理念に背を向けて軍閥化を図ることに対して、孫文らには不満があったにもかかわらず、当初は陳炯明に対抗するだけの勇気がなく、寛容を持って陳との共存を図っていた。したがって、蔣介石の陳炯明に対する非妥協的な主張は、後になって、先見性があったとして評価されるようになったのである。

第三期において、蔣介石が抗議した対象は、孫文である。蔣介石としては、自らの行動を束縛するような制度を排除し、十分な自主性と活動空間を要求したのである。長期にわたって軍閥に裏切られた結果、国民党の失敗の原因は自らの軍事力を持たないことにあるという事実を、このころには孫文をはじめ他の国民党元老たちも痛感していた。したがって、十分な責任をもって、党に対する忠誠心がある軍事力を養成したいという蔣介石の訴えに対しては、同僚の間で共感する者が多かったのである。[54]

「勇敢、篤実にして軍事に詳しい」[55]というのが孫文の蔣介石に対する評価である。これらの特質が端的に示されることになったのは、一九二二年六月一六日の陳炯明の反乱のときであった。このとき、陳炯明軍が広州を支配したため、孫文は身の安全のために軍艦に移らなければならなかった。孫文の電報に接した蔣介石は、ちょうど大本営参軍を辞職して故郷に帰ったばかりであったにもかかわらず、単身で窮地に陥った孫文のところへと飛んできた。そして、四二日間にわたって反乱軍の集中砲火を浴びながら、艦内に閉じこもり、孫文と生死を共にしたのである。[56]

このように、陳炯明の反乱事件は、国民党に対する蔣介石の忠誠心と勇気とを改めて立証する場にもなった。それまでの蔣介石については、あまりにしばしば辞職して、そのために戦場から離れることがあったため、すでに述べたようないろいろな事情や、蔣介石な

りの主張があったにしても、彼の辞職に対してとかく噂があったことも否定できない。しかし、この事件への対応を通して、彼は危険があれば戦場から逃亡するというような臆病者ではないことが誰の目にも明らかになったのである。

ところで、蔣介石は、国民党に対する忠誠心があり、また危機に直面する勇気があるという特質のほかに、自分を宣伝することにも熱心であった。すでに述べたように、この時期の六年間に蔣介石が職務に就いて働いていた日数は合計およそ一年八か月、六二八日間しかなかったが、彼は休職している時期にも、作戦計画書をはじめとして、時局に対する報告書などを孫文に送ることを怠らなかった[57]。つまり、彼は休職していても孫文との連絡を絶やすことはなかった。すなわち、彼は建白書の提出を通じて、革命に対する忠誠を示すだけではなく、自分の実力を見せようとしていたのである。

いいかえれば、蔣介石は常に、自分の動向を孫文に知らせるように努めていたということである。こうして緊密な連絡を保っていたことによって、彼の革命に対する執着及び学問に対する熱意などが、孫文に深く印象づけられることになった。一九二三年八月一六日、孫文によって蔣介石がソ連訪問代表団団長に任命されたのは、彼が戦場で実戦を指揮できる軍人であるばかりではなく、勉強にも強い意欲をもつという特質が孫文に認められたためであった。

ところで、このソ連訪問団の最大の成果として、ソ連の援助に基づいて、士官学校および革命軍を創設することが決まった。それゆえにこそ、一九二四年一月二四日、蔣介石は士官学校創設の準備委員会委員長に任命された。これによって、蔣介石は自らがとりつけてきた約束を自分で実現することになったのである。

それにもかかわらず、そのわずか一か月足らず後の二月二一日に彼は再びその職を辞した。その理由は、学校を運営するための自主的財政権が彼にはなかったことにあった。この辞職に際して、蔣介石は辞職願を出しただけではなく、さらに三月二日に孫文に手紙を書き送った。この手紙で彼は、蔣介石個人に対する孫文の信頼が不十分であることを指摘したばかりではなく、孫文のほかの人事に対しても不満をぶつけた。つまり、蔣介石は、ただ学校運営の自主権を希望しただけではなく、彼を支える体制の構築まで要求した。具体的にいえば、それまでに上海に左遷されていた胡漢民を広州に呼び戻し、民政の最高責任者に任命すべきであると提言したのである[58]。

この手紙を受け取った孫文は、それから二週間ほどの三月一五日に、胡漢民に向けて大本営秘書長に任命する招聘状を送った。また、三月一七日には、禁煙総督長・楊西巌（一八六八—一九二九）を免職した。これらの人事異動によって、蔣介石にとって、中央政府内の主な対立相手が排除されるとともに、盟友が実権を握るようになった。このように孫文は、蔣介石の要求を完全に受け入れたのであった[59]。

要求が満たされたため、蔣介石はほぼ一か月後の四月二六日に前職に復帰して、五月三日には軍官学校校長に任命された。この黄埔軍官学校こそが国民党にとって真の革命軍創設の出発点であり、同時に、蔣介石の本格的な活躍の出発点ともなったことは周知の通りである。

ところで、それまでの一一回におよぶ辞職とは異なり、一二回目の辞職だけが蔣介石にとって満足な結果をもたらした理由はなんだったのだろうか。このときには、彼の要求を満足させるべきだとする声が、国民党内に広がっていたことが重要であった。つまり、ソ連での経験に基づいて、革命精神に燃えた国民党軍の創設を蔣介石の手に託すしかない、という共通認識が国民党内に形成されてきたのである。つまり、この時期における蔣介石の栄達は、孫文に抜擢されたというだけではなく、時代の要求に応える資質に恵まれていたことも大きな要因であった。

蔣介石がその生涯で最後に日本にきたのは、一九二七年九月二八日のことであった。このときの肩書きは、「元国民革命軍総司令」であった。つまり、一九二六年七月九日に中国の統一を目指して開始された北伐においては、蔣介石が軍事面における最高責任者であったが、北伐軍が揚子江地域に進軍したとき、一九二七年四月一二日に蔣介石は上海で反共クーデターを断行した。さらに、つづく四月一八日、蔣介石は南京政府を樹立し、武漢にある中央政府を否定した。その後、彼は国民党分裂の責任を取って、同年八月一二日に司令官を辞職したのであった。

辞職した蔣介石には、再起に向けた充電期間が必要であったため、日本を再起の拠点として選んだ。ところで、日本を選んだ理由の一つは、再婚問題であり、もう一つは、日本社会の蔣介石に対する評価を知ろうとしたためであった。

当時、彼は再婚を考えていたのだが、その相手は、アメリカに留学し長期のアメリカ滞在経験を有する宋美齢（一八九七―二〇〇三）である。宋美齢は、上海の名門の出身で、兄は財政部長・宋子文（一八九四―一九七一）であり、姉は孫文の妻・宋慶齢（一八九三―一九八一）であった。このため、彼女には中国の実業界ばかりでなく、アメリカでも各界に広い人脈があった。したがって、蔣介石にとっては、彼女と結婚すれば、中国の実業界及びアメリカの各界とのパイプを強化できることは明らかだった。

この当時、宋美齢の母・倪桂珍が有馬温泉に滞在していたため、蔣介石は、日本訪問を契機として倪桂珍に挨拶する機会を得るとともに、結婚の承諾を得られるのではないかと考えたのである。また、蔣介石にとって、この時期の日本訪問は一石二鳥となる可能性があった。まずは、宋美齢との婚約を求めるという名目で日本を訪問し、合わせて、日本社会における蔣介石個人への評価を推し量り、今後の自身の進路を決めようと考えていたのである。つまり、日本が蔣

介石を歓迎してくれるようであれば、日本に滞在しつつ中国本土の様子を観察するが、もし歓迎されなければ欧米に外遊しようと考えていた。

蔣介石が上陸したのは、長崎港であった。到着すると直ちに、彼は有馬温泉へと飛び、宋美齢の母に会いに行った。蔣介石の思い描いたとおり、倪桂珍は宋美齢との結婚を認めてくれた[60]。また、訪日した蔣介石の東京訪問を歓迎する報が、彼の下へ次々に飛び込んできた。例えば、一九二七年九月三〇日の日記に「宮崎が日本政局の様子を説明してくれた。彼によれば、秋山と田中は私の日本訪問を望んでいる[61]」と書いている。また、一〇月一〇日の日記には、「岳軍が東京から帰ってきた。向うの様子を詳しく分析してくれた。彼によれば、日本の朝野を問わず、私が中国革命の大任を担当することを期待している。そういうわけで、私は東京へ行って、古い友人に会おうと決めた[62]」とある。

この二日分の日記を手がかりに考えると、まず、蔣介石が長崎に到着した際に宮崎龍介（一八九二―一九七一）が会いに来たことがわかる。そのときに、宮崎は秋山定輔（一八六八―一九五〇）などの友人をはじめ、総理大臣・田中義一（一八六四―一九二九）までが蔣介石の日本訪問を歓迎しているという様子を伝えた。そこで、宮崎の情報を確認するため、蔣介石は同行していた張群（一八八九―一九九〇）を東京へ派遣した。そして張群によって、情報が正しいことが確認されたため、彼は東京へ行くことを決意したのであった。

彼の日記によると、東京において蔣介石が会見した人は、五種に分類できる。（一）自分がお世話になった恩人、（二）長期にわたって中国革命運動を応援してきた同志、（三）中国とかかわる日本の官僚、（四）実業家、（五）政治家、である。

第一の人々は、高田連隊時代の上司であった第十三師団長・長岡外史、第十九連隊長・飛松寛吾などである。第二としては、頭山満、犬養毅、内田良平、佃信夫、萱野長知、梅野庄吉、秋山定輔、水野梅暁などである。第三は、外務事務次官・出淵勝次、参謀本部第二部長・松井石根少将、総理側近の佐藤安之助少将などである。第四は、渋沢栄一、児玉謙次、添田寿一、白岩龍平などである。第五は、総理大臣・田中義一をはじめ、立憲民政党総裁・浜口雄幸、満鉄総裁・山本条太郎、立憲政友会代議士・小泉又次郎、床次竹二郎などである[63]。

このように、四二日間の日本訪問中に蔣介石は幅広く各界を代表する人々に会った。その中で、ただ懇親のため以外に、二回以上会談をした人として、頭山満、佃信夫、萱野長知、秋山定輔、水野梅暁、宮崎龍介、松井石根、佐藤安之助、山本条太郎などの名前が挙げられる。

これらの人々に焦点を絞れば、彼が重点を置いて積極的に付き合

った人には、二種類あった。その一つは、中国とかかわる官僚と政治家である、もう一つは、長期間にわたり中国革命運動を支援してきた同志である。いいかえれば、日本政府の対中政策における軍部と満州問題の位置づけを理解するために、蔣介石は参謀本部の情報管理担当者であった松井をはじめ、総理の中国問題ブレーンであった佐藤との交流を頻繁に行い、また、満鉄総裁山本との対話を怠らなかった。つまり、これらの交流の目的は、情報を交換してお互いの立場を理解することにあった。

こうした現実的な目的のほかに、彼がより多くの時間を作って交流に努めたのは、中国革命運動を支援してきた同志たちであった。これらの同志は、蔣介石の友人というより、むしろ孫文の友人たちである。したがって、この交流の目的は、先輩からの提言を聞くことにあったともいえる。例えば、一九二七年一〇月一四日の日記に「革命計画を巡り、秋山定輔と対話した。かつて中師が日本にいた際、このおじしか敬服していなかった。日本の政治家は彼しかいないとよく言っていた。今日は、彼と五時間ほど話したが、彼は、私の計画に賛成してくれただけではなく、さらに私の計画の規模は、中師より立派であると褒めてくれた。夜には、水野、佃と話したが、皆が私を褒めてくれた(64)」とある。

この日記にある「中師」とは、孫文のことを指している。この日記からは、蔣介石がいかに日本の同志の考えを大切にしていたかが窺える。特に、秋山定輔と二人だけで五時間にわたって話し続けたということは、お互いが夢中になって話したということであろう。

蔣介石は、後半生を通じて、孫文の革命事業を受け継ぐ者と自任していた。軍人出身である蔣介石は、自身の出世が武力に基づくものだというイメージを打ち消すため、つねに孫文の後継者であると宣伝したのである。したがって、彼は孫文を否定するような言葉を一度も公式には言わなかった。逆にいえば、国民政府における孫文の位置づけは、蔣介石の政治力が高まるとともに高くなったともいえる。つまり、蔣介石は、孫文を神格化させるとともに、後継者である自分の地位を正統化しようとしてきたのである。

孫文についての中国国内における評価が、「革命の先駆者」から「建国の父(65)」へと変わったのも、こうした神格化政策の成果の一環である。このように、両者の関係がいわば運命共同体となった以上、蔣介石自身が実行したあらゆる政策は、あくまでも孫文の教訓に従ったものであると強調するというのが、蔣介石の公式の態度となった。孫文が上、蔣介石が下という枠組みが国内政治体制の一環に組み込まれたため、蔣介石と孫文とを並べて一緒に検討するということは、当時の中国および国民党ではありえないことであった。

したがって、日本において、蔣介石の業績が孫文を超えているという評価を聞くことは、何よりも励みになったに違いない。しかも、こうした話を提供した人が、孫文をよく知り、また孫文からも尊敬

された人であったことは、蔣介石にとってなお一層の価値があっただろう。ただし、このような話は、蔣介石から誰かに語ることはできなかったので、日記の中に残されているだけである。

一九二七年一一月五日に、蔣介石が田中義一総理大臣と会談した際には、「元来日本へ渡航ノ当時ハ日本ヲ経テ欧米各国ヲ廻リ五年ノ日子ヲ海外ニ費ス予定ナリシモ渡日以来一個月、貴国各方面ノ人士ト接触シタル結果、本国ノ時局ヲ空シク海外ニ傍観スルコトハ事実上不可能トナレリ仍テ自分個人ノ考ヘヲ述ヘ閣上ノ御教示ヲ承リタル上帰国スルコトニ決心セリ[66]」と語った。

彼が日本に来た事情から考えると、この会談における蔣介石の発言は単なるお世辞ではなかった。つまり、彼が日本へ来る前には、総理大臣は無論のこと、朝野にわたって各界の代表的な人物に会えるという自信はなかった。特に、中国の内部では、孫文が生前に築いた「国共合作」体制を、蔣介石が打ち崩したことに対して、これは孫文に対する裏切りであると罵倒されたため、日本における孫文の旧友たちが彼を認めるかどうかについて自信がなかったのである。しかし、長崎に上陸すると、日本では朝野を問わず彼を歓迎していることを知って、蔣介石は日本での滞在を延ばすことにし、東京へ行くことも決めたのであった。

ところで、日本に滞在している間に、予想外に中国本土の情勢が彼に有利な方向に急転回し始めた。まず、直系の軍隊の連隊長が、蔣介石を復帰させる署名運動を展開した[67]。次に、いままで最大の敵であった、武漢政府の汪兆銘が彼の復帰を促した[68]。つまり、蔣介石が下野した当初の原因が、蔣介石が武漢政府と南京政府との統一運動の障碍であるということだったにもかかわらず、統一後の南京政府は内部の矛盾をうまく解消できず、逆に蔣介石の復帰を望むことになったのである[69]。

田中との会談を終えて三日後の一一月八日に、蔣介石は東京から離れて帰国の途についた。帰国した蔣介石は、翌一九二八年一月七日に国民革命軍総司令に復職した。復職した彼は、三か月後の四月七日に再び北伐を開始した。

周知のように、この北伐の途上、山東半島の付け根にあたる済南で国民革命軍と日本軍との衝突事件が勃発した。この済南事件の結果として、蔣介石と日本政府との関係が急に悪化してしまった。さらには、その後、満州事変の勃発によって、一五年にわたる両国の断続的な戦争へと突入していくのである。

ところで、こうした状況にもかかわらず、蔣介石は日本という国に悪感情を持っていなかった。むしろ彼は、状況が変われば、両国の関係は改善できると信じていた。例えば、一九三四年三月七日に南昌で「中国の外交政策」というテーマで講演した蔣介石は、日本が中国を侵略してきたのは、中国が自国の独立を守らなかったためであると指摘した。したがって、中国が安定すれば、日本は中国の

敵にはならないと強調した。さらに、国内が団結して安定した中国となり、これからお互いに助け合おうと日本がいうなら、相互に接近していくことができると語った[70]。

いいかえれば、日中関係が悪くなったのは、日本が中国を侵略してきたからであるが、日本が中国侵略政策を放棄して助け合うという政策に変わってくれれば、中国は必ず日本に接近していくだろうと蔣介石は考えていた。このように、両国の関係は、本質的には親善を図れるはずなのであって、現状が悪くなったのは、これまでの日本政府の政策が原因であった、と考えていたのである。

このように日本について、不変の敵ではないと考えていた蔣介石の、日本に対する認識は、戦争による主観的憎悪の感情に左右されることはなかった。逆に、彼は日本の長所をよく認識して、特に中国軍は日本軍の武士道精神を学ぶべきであると主張していた。

例えば、一九四〇年二月二二日から四日間、柳州に百数名の将校を召集して、南寧作戦を含む冬季攻勢の検討会を実施した。彼は、第五師団長今村均（一八八六―一九六八）によって書き記され、戦場に残されていた「九塘を返璧す」という弔辞を中国語に訳して出席者に配った[71]。

この弔辞には、「この度の作戦の発端は、九塘に駐屯しているわが軍の一部が蔣軍に包囲攻撃されたことを利用して、敵主力背後に進出して、一挙に大打撃を与えようとする作戦であった。ここに駐屯していたわが軍は数連隊しかなかったにもかかわらず、五旬半にわたって蔣軍の十数師団と対峙してきた。今度の蔣軍の戦いはとても勇敢で、敬意を表する価値があると思われるが、数量から言えば、少数のわが軍が、優勢に立つ蔣軍と奮戦し、皇軍の栄耀を輝かせたことはさらに評価すべきである。九塘を堅守して、わが軍が蔣軍の意図を粉砕するという目的を達成したため、九塘を蔣軍に返璧する。最後に、この戦場で戦没した数万人の両軍勇士を弔い、彼らの武勲を賛美し、冥福を祈ろう[72]」と記されていた。

九塘は南寧の西方にある、南寧の前哨基地である。南寧は、当時ベトナムから広西省に運び込まれる物質の集散地であり、その量は中国の全輸入量の三割前後にも及んでいた。そこで、日本軍としては、南寧を攻略することで、同地を通じての中国の対外貿易の経路を遮断しようとしたのである。こうして一九三九年一一月二四日に日本軍の第五師団は、南寧を奪い、崑崙関及びベトナム国境に近い竜州にまで進出した[73]。

これに対して中国は一五万四千ほどの大軍を動員して[74]、反攻作戦を開始し、崑崙関を奪回した上に南寧を包囲した。南寧に残る日本軍は補給路を断たれ、空輸によって細々と生命をつないでいたが、翌四〇年一月末に、二個師団の増援部隊を得て助かった[75]。

南寧作戦における日本の主力参戦部隊は、第五師団と台湾混成旅団であった[76]。当時の部隊編制の兵力は、合計約三万二八二三名であ

った[77]から、両軍の兵力比はおよそ三万二千対一五万四千であった。この数字から見れば、日本軍がいかに厳しい状況に立たされていたかを容易に想像できるだろう。特に南寧の外郭にある九塘は、さらに危うい状況にあった。

ところで、九塘の日本軍としては、包囲線を突破しない限り全滅させられる状況にあったにもかかわらず、撤退する直前に、司令官は戦没した仲間に弔辞を述べるという行事を忘れなかった。

蔣介石はこれを取り上げて、中国軍もこれに学ぶべきであると訴えた。彼によれば、今まで日本軍が戦場を撤退する際には、必ず戦没した仲間の遺体をも連れて帰っている。今回の戦闘では、それだけの余裕がなかったため、遺体をそのまま残したが、それでも冥福を祈るための行事はきちんと行ったのである。

戦場で弔辞を述べることには、二つの意味が含まれている。一つは、戦没者に対する敬意であるが、もう一つは、生きている者による、亡くなった仲間に対する宣誓である。つまり、お互いに同じ目標を持って戦場に来たのだが、一部の仲間だけが亡くなってしまったのである。このため死亡した者は、当初の共通の目標をともに完成させることができなくなった。もはや、この未完成の目標を達成できるのは、生き残った者だけである。だからこそ、ここで弔意を表する行事を行い、生き残った者は、必ず目標を達成することを死者に誓うのである。

いいかえれば、行事を行う目的の一つは、生存者に自分たちの責任を想起させることである。つまり、死んだ仲間を慰める唯一の手段は、死者にとって未完成のまま終わってしまった目標を完成させることしかない、ということを生存者が認識することである。このことから、日本軍がいつも戦場で勇敢に戦えるのは、単に軍紀が厳しく訓練が行き届いているためだけではなく、死んだ仲間を思えばこそ頑張るという意志も含まれているのだ、と蔣介石は説明した[78]。

このように、戦場に残されていた一枚の紙をも蔣介石は見落とさず、この紙に秘められた日本軍の魂を見出した。この「九塘を返璧す」という弔辞に対する対応には、蔣介石の、日本について勉強しようとする熱意と日本文化に対する理解の高さが示されている。もちろん、戦争である以上、敵を倒すことが何よりも優先されることは、蔣介石についても例外ではなかった。それにもかかわらず、日本と戦いながらも、それまでの日本文化に対する彼の尊敬の念は変わらなかったのである。

このように、日本の文化を尊敬し、深く理解していたため、蔣介石は、日中両国の国民は必ず友人になれると信じていた。第二次世界大戦の終戦後、彼が敗戦した日本に対して復讐的な政策を取らなかったことは、そうすることで両国の友好関係を新たに築くことができると信じていたからであった。

五、結論

蒋介石はその生涯で六回来日した。そこで、彼の来日を留学時期、青年期、壮年期に分けて考えれば、次のようにまとめることができる。一九〇六年と一九〇八～一九一一年の二回、日本で勉強したことは、彼が現代科学文明の洗礼を受ける起点となり、日中両国文化の差異を探求する始まりとなった。特にその後の蒋介石にとって、建軍や国家統治を行う上で、日本の軍隊生活の経験からの啓発は大であった。軍人は国家命令に従うことを天職とすべきであること、政治的な訓練は軍人を勇敢に戦場へ向かわせるための秘訣であること、兵営は職業学校の役割も果たし、入隊した兵士は皆、技術を習得する機会を得るべきであること、等々。これらの国民政府軍建軍に盛り込まれた内容は全て、蒋介石が日本の留学経験から得たものだった。

青年期の来日では、軍事研究に没頭したのが特徴である。時期は一九一二年と一九一三～一九一五年に分けられる。前者では、軍事専門誌を創刊し、革命後の中国の進路と国際状況を巡って、自分なりの研究成果を読者に紹介した。後者では、軍事教官を招聘し、陸軍士官学校のすべての必修科目を独学で勉強した。つまり、この二つの時期において蒋介石は、亡命のための来日であったにもかかわらず、これで意気阻喪してしまうのではなく、かえって猛烈に勉強することによって、この不遇を乗り越えようとした。後に彼が国民党軍の創設者として台頭した経緯を考えれば、この時期の勉強は彼が一人前の軍人となる素質を養成する基盤になったのではなかろうか。

壮年期には、一九一九年と一九二七年の二回来日した。二回とも革命事業の行き詰まりに悩みつづけて、突破口を探すために来日したことが特徴である。前者では、旧友との交流を中心に日本訪問を展開したが、後者では、旧友との交流のほか、官僚や政治家とも会談した。かつて日本は、中国革命の発祥地であったため、長い間中国革命を支えてきた友人も多かったのである。これら旧友は単に中国革命発展の経緯をよく知っているのみならず、中国革命運動に従事した先輩とも馴染みであった。つまり、これらの同志は、蒋介石の友人というより、むしろ孫文の友人である。したがって、彼らの提言は、蒋介石にとってなお一層参考にする価値があった。特に、一九二七年蒋介石は孫文が生前に築いた「国共合作」体制を打ち崩した責任を取って、下野して来日した。この際、日本の同志が彼の反共政策を肯定したことがいかに励みになったかを、彼は日記に記している。つまり、中国国内では、彼の反共政策は孫文に対する裏切りであると罵倒されたが、孫文とともに中国革命に携わった日本の同志は反共を是として評価した。蒋介石としては、中国国内より日本に知音が多く、日本の同志からの励ましも彼を支える力になっ

たわけである。

このように、日本は青年期の彼を啓発した場所であり、また、壮年期の彼に勇気を注ぎ、革命再起の活力を齎した場所である。こうした個人の経験から、彼は中国が日本の近代化経験を手本として学ぶべきであると考えたのであった。これは同時に、彼が同胞に対して、日本に学ぶようにと呼びかける動機ともなった。

注

＊引用に際しては、旧字体を新字体に改めた。

（1）蒋介石は一八八七年一〇月三一日に生まれたが、父蒋粛庵が亡くなったのは、一八九五年八月二四日であった。

（2）日本留学時代に関する蒋介石の評価は、次のような講演あるいは訓示により窺える。すなわち、蒋介石「新生活運動之要義」（一九三四年二月一九日）、「興隆山軍事会報訓詞」（一九四二年八月二二日）、「対従軍学生訓話」（一九四四年一月一〇日）、「対全国青年遠征軍退伍士兵広播詞」（一九四六年六月三日）、「総理『知難行易学説与陽明『知行合一』哲学之綜合研究」（一九五〇年七月三〇日）、「実践与組織」（一九五〇年六月一一日）などである。黄自進編『蒋中正先生対日言論選集』（台北、中正文教基金会、二〇〇四年）所収を参照。

（3）蒋介石「対従軍学生訓註」、同上、九一四頁。

（4）『蒋介石日記』民国六年前事略（アメリカ、スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵、原本）。

（5）サンケイ新聞社『蒋介石秘録　第二巻：革命の夜明け』（東京、サンケイ新聞社出版局、一九七五年）、五八頁。

（6）『振武学校沿革誌：三十九年九月調』（東京、東洋文庫蔵、原件）。

（7）矢津昌永『新撰外国地理』（東京、丸善株式会社、一九〇一年）、四〇頁。

（8）桑原隲蔵『中等東洋史』（東京、大日本図書株式会社、一八九八年）。

（9）吉国藤吉著、和田鼎校『西洋史』（東京、内田老鶴圃、一九〇三年）。

（10）「大清欽差出使大臣汪大燮致日本外務大臣伯爵小村寿太郎函」（宣統二年一〇月九日）、『在本邦清国留学生関係雑纂：陸軍学生の部、第四巻、外務省外交史料館蔵、受第八五三〇八号、原件』。

（11）『蒋介石日記』一九二九年八月三一日。

（12）「陸軍大臣子爵寺内正毅発外務大臣伯爵小村寿太郎宛の回答」（一九一〇年一一月二八日）、『在本邦清国留学生関係雑纂：陸軍学生の部、第四巻、受第二六七〇四号、原件』。

（13）「野戦砲兵一ケ年間教育順次表」『明治元年〜四四年陸軍教育史：附録草案』（日本、防衛省防衛研究所図書館蔵、原件）。

（14）『野戦砲兵第十九聯隊歴史』（日本、防衛省防衛研究所図書館蔵、原件）。

（15）山崎正男編『陸軍士官学校』（東京：秋元書房、一九七〇年）、

三四—三五頁。

(16)「陸軍大臣男爵石本新六発外務大臣子爵内田康哉宛の通牒」(一九四四年一一月八日)、『在本邦清国留学生関係雑纂：陸軍学生の部、第五巻、外務省外交史料館蔵、陸普第三七九七号、原件』。

(17) 黄自進「蔣中正先生在日本的一段歳月」(『近代中国』第一四七巻、台北、二〇〇二年二月)、四九—五〇頁。

(18) サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第三巻：中華民国の誕生』(東京、サンケイ新聞社出版局、一九七五年)、三七—四五頁。

(19) 黄自進「青年蔣中正的革命歴練」(『中央研究院近代史研究所集刊』第六五号、台北、二〇〇九年九月)、六—八頁。

(20)『民立報』、一九一二年一一月二〇日。

(21) 浅野和生『大正デモクラシーと陸軍』(群馬県、関東学園大学、一九九四年)、八六頁。

(22) 蔣介石「革命戦後軍政之経営」(一九一二年七月)、黄自進編『蔣中正先生対日言論選集』所収、二五—三〇頁。

(23) 蔣介石「征蒙作戦芻議」(一九一二年一二月)、黄自進編『蔣中正先生対日言論選集』所収、三九—四二頁。

(24) 李勇、張仲田『蔣介石年譜』(北京、中共党史出版社、一九九五年)、二四—二五頁。

(25) サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第四巻：対日屈辱外交』(東京、サンケイ新聞社出版局、一九七五年)、七二—七九頁。

(26) 正式大会を挙行したのは、一九一四年七月八日である。同上、九〇—九七頁。

(27) 保阪正康『蔣介石』(東京、文春新書、一九九九年)、四三—四四頁。

(28) サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第四巻：対日屈辱外交』、九一—九二頁。

(29)『政府公報命令』、一九一四年六月一五日。

(30)「在上海総領事有吉明発外務大臣男爵加藤高明宛の報告書」(一九一四年七月一〇日)、『各国内政関係雑纂：支那の部：革命党関係(亡命者を含む)、外務省外交史料館蔵、第一二巻、機密第五九号』。

(31) 同上、第一二—一三巻。

(32)「在哈爾浜総領事代理領事官補川越茂発外務大臣男爵加藤高明宛の報告書」(一九一四年七月二四日)、同上、第一二巻、機密第三六号。

(33) 黄自進「青年蔣中正的革命歴練」(『中央研究院近代史研究所集刊』第六五号、台北、二〇〇九年九月)、一七—二一頁。

(34) 両者面会回数は次のようである：八月一六日二回、八月一八日二回、八月一九日一回、八月二〇日二回、八月二二日一回、八月二三日一回、八月二四日三回、八月二五日三回、八月二六日一回、八月二七日一回、八月二八日四回、八月二九日一回、八月三〇日二回、『各国内政関係雑纂：支那の部：革命党関係(亡命者を含む)』、巻一三。

(35)「支那亡命者会合内容ニ関スル件」(一九一四年八月二九日)、同上、乙秘第一六七八号。

(36) 黄自進「青年蔣中正的革命歴練」、二一一—二一三頁。

(37)『蔣介石日記』一九二九年八月三一日。

(38)黄自進「青年蔣中正的革命歴練」、二四―二五頁。

(39)「孫文ノ動静」『各国内政関係雑纂：支那の部：革命党関係（亡命者を含む）』、第一六―一七巻。

(40)サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第五巻：青年士官時代』（東京、サンケイ新聞社出版局、一九七五年）、三八―四一頁。

(41)本庄比佐子「中国革命への道」（中嶋嶺雄編『中国現代史「新版」』所収、東京、有斐閣、一九九六年）、七四頁。

(42)毛思誠『民国十五年前之蔣介石先生』（香港、龍門書店、一九六五年）、八三―八四頁。

(43)黄自進「青年蔣中正的革命歴練」、二九―三一頁。

(44)『蔣介石日記』一九三七年四月二六日。

(45)サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第五巻：青年士官時代』、一六八―一六九頁。

(46)李雲漢『中国国民党史述：第二編民国初年的奮鬥』（台北、中国国民党中央委員会党史委員会、一九九四年）、二八五頁。

(47)周盈盛『孫中山和蔣介石交往紀実』（石家庄：河北人民出版社、一九九三年）、三三頁。

(48)毛思誠『民国十五年前之蔣介石先生』、六六頁。

(49)サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第五巻：青年士官時代』、一八三―一九七頁。

(50)一九一八年三月一五日粤軍総司令部作戦科主任に赴任、同年七月三一日に辞職。同年九月一八日粤軍第二支隊司令官に赴任、翌年三月五日に休職。一九一九年五月二日に復職、同年七月二七日辞職。一九二〇年四月一一日漳州粤軍総司令部に赴任、四月一五日辞職。同年一〇月一六日粤軍第二軍許崇智部総参謀長に赴任、一一月四日辞職。一九二一年二月一四日広州の平桂作戦会議に参与、当日辞職。同年五月二〇日再び広州の平桂作戦会議に参与、二四日辞職。同年九月一七日広西省西寧の粤軍北伐作戦会議に参与、当日辞職。一九二二年一月一八日に大本営参軍に赴任、四月二三日辞職。同年一〇月二二日福州の東路軍討賊軍総司令部参謀長に赴任、一一月二四日辞職。同年一二月一八日再び福州に赴任、翌年一月一五日に辞職。一九二三年六月一七日陸海軍大元帥行営参謀長に赴任、同年七月一二日に辞職。一九二四年一月二四日に黄埔軍官学校準備委員会委員長、同年二月二一日に辞職。

(51)奥村哲『中国の現代史：戦争と社会主義』（東京、青木書店、一九九九年）、八〇頁。

(52)池田誠、安井三吉、副島昭一、西村成雄『図説中国近現代史』（京都、法律文化社、一九九三年）、一〇四頁。

(53)黄自進「青年蔣中正的革命歴練」、三八―三九頁。

(54)同上、四〇頁。

(55)「致蔣中正信託陳炯明回粤事函」（一九二〇年一〇月二九日）、秦孝儀主編『国父全集』所収、（台北、近代中国出版社、一九八九年）、二七〇頁。

(56)サンケイ新聞社『蔣介石秘録　第六巻：共産党の台頭』（東京、サンケイ新聞社出版局、一九七五年）、二七―三九頁。

(57) 例えば、一九二〇年六月に彼は、『湘粤軍共同作戦計画』を作成した。一九二一年一月から三月までに、時勢に対する分析報告書を三つ提出した。一九二二年一二月に完成したのは、『北伐作戦計画』であり、一九二三年三月に書き終わったのは、『平定潮梅計画』であった。

(58) 蒋介石「上総理書縷陳一己衷曲与対党主張」、秦孝儀編『総統蒋公思想言論選集』（台北、中央文物供応社、一九八四年）所収、第三六巻、九八―九九頁。

(59) 黄自進「青年蒋中正的革命歴練」、三七頁。

(60) サンケイ新聞社『蒋介石秘録　第七巻：統一への進撃』（東京、サンケイ新聞社出版局、一九七六年）、一七二―一七七頁。

(61) 『蒋介石日記：一九二七年九月三〇日』。

(62) 同上、一九二七年一〇月一〇日。

(63) 同上、一九二七年九月三〇日―一一月八日。

(64) 同上、一九二七年一〇月一四日。

(65) 孫文が正式に「建国の父」という名称を与えられたのは、一九四〇年四月一日である。つまり、国民党における蒋介石の地位が安定してからの行動である。

(66) 外務省編『日本外交年表並主要文書：下』（東京、原書房、一九六六年）、一〇五頁。

(67) 『蒋介石日記』一九二七年一〇月二〇日。

(68) 同上、一九二七年一一月四日、一一月七日。

(69) 山田辰雄「国民革命の時代」（中嶋嶺雄編『中国現代史「新版』所収）、一〇六―一〇七頁。

(70) 蒋介石「中国之外交政策」（一九三四年三月七日）、黄自進編『蒋中正先生対日言論選集』所収、二二九―二三二頁。

(71) 蒋介石「柳州軍事会議開幕訓詞」（一九四〇年二月二二日）、同上、七一二頁。

(72) 原文が見つからないため、中国語の文章を基にして、再訳したものである。

(73) サンケイ新聞社『蒋介石秘録　第一三巻：大東亜戦争』（東京、サンケイ新聞社出版局、一九七七年）、四五―四六頁。

(74) 防衛庁防衛研修所戦史室編『支那事変陸軍作戦：昭和一六年一二月まで』（東京、朝雲新聞社、一九七五年）、六九頁。

(75) サンケイ新聞社『蒋介石秘録　第一三巻：大東亜戦争』、四六頁。

(76) 防衛庁防衛研修所戦史室編『支那事変陸軍作戦：昭和一六年一二月まで』（東京、朝雲新聞社、一九七五年）、四八頁。

(77) 原剛、安岡昭男編『日本陸海軍事典』（東京、新人物往来社、一九九七年）、五〇〇頁。

(78) 蒋介石「柳州軍事会議開幕訓詞」、七一七頁。